

韓国薬学研修報告

竹下茅咲
植家晴紀
渡邊紗里

2019年8月7日から10日の4日間で行われた韓国研修に参加した。研修では、主に漢陽大学附属病院、漢陽大学薬学部、門前薬局などを見学し、漢陽大学薬学部の学生さんや先生方と交流する機会もあった。私たちのグループでは韓国の薬局と漢陽大学での見学について報告する。



↑ 薬局内の様子

日本では OTC 医薬品をドラッグストアで購入することが多くあるが、韓国ではドラッグストアを見かけることは少なく、薬局が多いように感じた。見学させていただいた門前薬局では1日約 300 枚の処方箋に対し 3 人の薬剤師で対応していた。日本では、薬剤師 1 人が 1 日に扱うことのできる処方箋の数は 40 であるのに対し、韓国では 70 と定められており、その点で日韓の大きな違いを感じた。また、処方箋の有効期限も日本のように法律で一律に定められている訳ではなく、病院や診療所などの処方箋を発行する施設により異なる。たとえば、今回伺った門前薬局の病院の場合、処方箋の有効期限

は1週間であった。

韓国では院内処方に比べ院外処方の方が患者の支払う額が少ない。これは、院外処方を促すためであるという。韓国の場合、長期での処方を受ける患者、精神科を受診している患者、重症の患者など特定の患者以外は基本的に院外で薬を受け取ることになっている。よって、この門前薬局にも病院着を着た患者が多く来店していた。



↑ PTP から出された状態で保管されている錠剤

処方箋はスキャナーに通すことでパソコンと分包機にデータが移行し、スムーズに処方と会計ができる仕組みであった。分包機にはよく用いられる医薬品がセットされており、その他の医薬品は棚に並べられていた。並べ方は主な使用目的により分けられており、それぞれ 50 音順になっていた。

薬剤の配置に関しては、日本と異なることもさることながら、各店舗によっても違いがあっ

た。ある薬局では、使用頻度の高い薬剤のボトルを机中に広げてあり、ある薬局では錠剤をPTP から出した状態でカセットに入れて配置していた。

調剤室の面積も日本のように法律で規定されている様子は無く、人1人が通れる程の狭い調剤室であることが多かった。

上記のように韓国ではドラッグストアを見かけることが少なく、日本ではドラッグストアで購入するような歯ブラシなどの日用品も数多く販売されており、日本との違いを発見した。

また、薬局を見渡すと日本の薬局に比べて漢方が多く置かれているように感じた。しかし、質問をしてみると実際に販売されたり処方されたりする漢方は全体の10%程で、そこまで多くないことが分かった。



↑薬局にて調剤を行う様子

病院付近には多くの薬局が立ち並んでいたが、近くにどんな診療科があるかによって、薬局内に置かれている薬の種類や店内の設備が若干異

なっていた。例えば、小児科の病院の近くに位置する薬局では、小児用の遊具が置かれており、小児が遊ぶための部屋が設けられていた。見学させていただいた薬局の中には、小児用として、スティック状の容器に薬を詰めているところがあった。これは、シロップなどに溶かして薬を服用する際に、容器に薬を投入しやすくするためというものであった。患者の目線に立ち、どのような工夫がなされていれば、アドヒアランスが向上するのか、薬局を使用する人達が心地よく過ごせるのかということについて、自分なりに考えることの重要性を感じた。



↑薬局内にある小児用のプレイルーム

次に、漢陽大学薬学部で見学させていただいたことについて報告する。韓国の薬学部は、現在2年間一般の大学で教育を受けた後、3年生から6年生までを薬学部にて過ごす。一般の大学で過ごす2年間で薬学部に入學するために化学系科目や数学等の必要な単位を取得する必要がある。また、単位取得と並行してPEET(Pharmacy Education Eligibility Test)という、薬学大学に入學するための試験に向けて生物系、物理系の科目も勉強する必要がある。

薬学部入試の倍率は約10倍で、日本に比べるとかなり高い倍率であることが分かる。また薬剤師国家試験への合格率は約99%だという。また、現在の韓国では、この2+4年制が採用

されているが、2018年の教育部の調査により全ての大学が薬学部の6年制への変更に賛成したことから、2021年が2+4年制での最後の入学試験となり、2022年から6年制の薬学部入試が開始される可能性が高いという。薬学部での実習は、病院実習が10週間、薬局実習が5週間、製薬会社での実習が3週間ある。学生はこの実習を受けた後、1年間のアドバンスコースがあり、病院、薬局、製薬会社、研究室のうちから一つを選択し、それぞれについてさらに詳しい実習を受ける。たとえば、薬局を選択した場合、3つの薬局を5週間ごとにまわり、計15週の実習を受ける。病院を選択した学生は服薬指導、TDM(Therapeutic Drug Monitoring)、医薬品情報学、抗がん剤の処方等について実習を行う。



↑生薬学実験室での学生さんによる研究室の説明

また、大学内の様々な施設についても見学させていただき、学生が普段使用している実習室や、各講座の研究室を見せていただいた。

研究室内に置かれている機器は比較的本学の研究室と似ており、遠心分離機などが置かれていた。各講座では教授を中心に様々な研究が行われており、例えば微生物学の研究室では、コレラの検出方法について研究しており、日本の

埼玉県の大学と共同で実験を行っているという。その他にも、服薬指導や調剤の練習をするためのモデル薬局や、動物実験に用いる動物を飼育する大きな動物舎があったりした。



↑漢陽大学内のモデル薬局

今回の研修では、漢陽大学の先生方、学生さん、薬局の薬剤師の方々、薬局で研修中の学生さんなど様々な方のお話を聞かせていただいたことで、韓国の薬剤師の在り方について広く学ぶことができたと感じた。研修でなければ立ち入ることのできない裏側を見せていただけたことで、実際に働く薬剤師目線に立って学ぶことができ、勉強へのモチベーションをあげることができた。また、韓国の方々との英語をはじめとするやり取りの中でコミュニケーション力の重要性を感じた。韓国語が話せなくても、英語が話せればある程度のコミュニケーションを取ることができるということ、それができれば十分に交流が楽しめるということも同時に学ぶことができた。

最後に、本研修に当たって、多大なるご支援をいただいた愛知学院大学薬学会に心よりお礼を申し上げます。